

論文

『魔女への鉄槌』に見る魔女及び魔術
- 第2部問1の考察を中心に -野村 仁子[†]

要旨

近世初期のヨーロッパで魔女裁判の嵐が吹き荒れた。魔女と疑われた人々（男性であれ女性であれ）は弁護の余地もなく拷問により自白を強要され、多くの場合火刑に処せられた。この裁判において教科書として使用された著書がある。1486年に出版された『魔女への鉄槌』(Malleus maleficarum)である。

この著書はドミニコ会修道士ハインリヒ・クラメルによるものであり、彼は同時代の聖職者に狂信的だと評される程に魔女の存在とその魔術の効力を信じていた。また彼は、悪魔が魔女の軍団を作りキリスト教国を滅ぼそうとしているという終末論的思想を持っていた。

近年日本でも魔女ないし魔女裁判研究は増加傾向にあり、その研究において『魔女への鉄槌』への言及は見られるが、それは二次的であることが多い。『鉄槌』自体の研究やその翻訳はほとんど行われてはいない。本論では魔女裁判研究の基礎となりえるこの著書の第2部（魔女が行う魔術）を詳しく見て行くことによって、魔女の実態を探って行く。

キーワード

魔女、魔術、『魔女への鉄槌』、中世、キリスト教

[†]愛知県立大学多文化共生研究所客員共同研究員

1、はじめに

1486年に出版された『魔女への鉄槌』"MALEUS¹ MALEFICARUM"（以下『鉄槌』）²は、ドミニコ会修道士ハインリヒ・クラメル（ラテン語名ハインリクス・インスティトリス）によって執筆された³。1400年前後は魔女や異端関連の書籍が多く著された時期でもあり⁴、『鉄槌』はその中の一つである。それにもかかわらず、『鉄槌』が特に魔女裁判

の元凶とまで称されるのは⁵、この著作がそれ以前の魔女関連の書籍や魔女を言及した箇所を纏め上げ、神学的根拠、異端審問官としての経験、裁判の実務的方法などといった魔女裁判を行うためのあらゆる事柄を網羅しているからである。『鉄槌』は魔女裁判の教科書となっていったのである。

さて、この『魔女への鉄槌』はトマス・アクイナスの『神学大全』にならって3部構成になっている。第1部では魔

1 Malleus(鉄槌)という言葉は、異端者の撲滅や正統信仰のために熱心に活動している聖職者に対して用いられた尊称であり、異端審問官の理想を明確に表しているとして好んで使われた。このことから、魔女裁判が異端審問の範疇にあることが伺える。

2 テキストとしては、Christopher S. Mackay, *MALLEUS MALEFICARUM, volume I, The Latine Text and Introduction*, Cambridge, 2006, Christopher S. Mackay, *MALLEUS MALEFICARUM, volume II, The English Translation*, Cambridge, 2006, Wolfgang Behringer, *Heinrich Kramer(Institoris). Der Hexenhammer. Malleus Maleficarum*, München, 2000. を使用した。

出版されてから1487年のイースターの頃までは、'Malleus Maleficarum'ではなく、'tractat wider dieZaubernisse'（魔術に対する論文）'tractat wider die zauberein'（魔女に対する論文）'tractat Meister heinrichs'（ハインリヒの論文）と様々な名前で呼ばれていた。

教皇教書、弁明書、ケルン大学の認定書が付された完成版は1491年に出版された。今日ケルン大学の認定書は一部クラメルの偽造ではないかと考えられている。また、認定書を注意深く読むと、ケルン大学の教授達が必ずしも『鉄槌』を通読していないこと、公証人が付いている教授とそうではない教授とに別れることが分かる。

3 『鉄槌』がハインリヒ・クラメルの単著なのか、ヤーコプ・シュプレングルとの共著なのかという問題は今日でも議論されている。しかし、多くの研究者はクラメルの単著であると考えている。シュプレングルはドイツにおけるドミニコ会の有力者であり、ケルン大学の教授でもあった彼の名前を権威付けのために借りたのであろうというのが、多くの研究者の一致する意見である。本論では、クラメルの単著であったという見解を採用し論を進めていく。議論の詳細については、Christopher, S. Mackay, *op. cit.*, Wolfgang Behringer, *op. cit.*, を参照。

4 『蟻塚』(formicarius) ヨハン・ニーダー、(1437), 『異端の魔女の鞭』(Flagellum Haereticorum Fascinariorum), ニコラ・ジャキエ (1450)

5 ロッセル・ホープ・ロビンズ (松田和也訳) 『悪魔学大全』、青士社、1997年、569頁。

女が神学的に異端であるという根拠⁶が、第2部⁷では著者の異端審問官としての経験を活かした魔女や魔術の実態についてとその予防法が、そして第3部ではスペインの異端審問官ニコラス・エイメリコの『異端審問指針』⁸をもとにして魔女裁判を行う方法（捜査から処刑まで）が詳細に述べられている。

本論では、その中でも特に第2部問1（1章-18章）の魔女が魔術を行う方法について論じていきたい。『鉄槌』において著者が中心に置いたのは、第1部の神学的論証であると考えられる。魔女裁判に反対する者がまだ多かった当時において⁹、魔女は異端であり、キリスト教信仰及びキリスト教徒に害をなす危険な存在であると周知のこととすることが急務であると著者は考えていたからである。そしてそれを実行に移すための第3部の裁判方法は後世の魔女裁判において重要な役割を果たすこととなる。では、著者の異端審問官としての経験について書かれた第2部はどのように扱われてきたのだろうか。これまでの魔女裁判や『鉄槌』の研究において第2部を詳細に扱っているものは無いに等しい。第2部、とりわけその問1では、魔女や魔術について、クラメル自身の経験や他の異端審問官の経験が紹介されている。従って、その内容は魔女と悪魔の関係や魔術の方法など魔女を魔女たらしめる根拠が述べられている。第1部の神学的論証は第2部の実際の魔女の行動に基づき、そ

れが如何にキリスト教信仰に反しているかを論じているものである。それ故、第2部の異端審問官としての経験がなかったらとしたら、第1部は完成しなかったであろう。

そこで、第2部の魔女及び魔術を検証することによって、クラメルが、どのような人々を魔女とみなしていたのか、また当時の人々が何をもって魔女を魔女とみなしていたのかを調べてみる。

2、魔女ないし魔女裁判への懐疑

1482年ローマから帰国したクラメルはより一層魔女裁判に力を入れた¹⁰。しかし、彼が成功した裁判はコンスタンツ司教区ラーフェンスブルク近郊における裁判¹¹だけであり、それ以外の地域ではクラメルの主張はあまり受け入れられなかった¹²。

特に1485年秋インスブルックにおける裁判において彼は完全に敗北している¹³。13世紀後半から14世紀初頭にかけて、それ以前とは異なる大規模な魔女裁判が始まりを見せていた¹⁴、14世紀に入り魔女関連の書物が何冊か書かれるようになってはいたが、クラメルの裁判の失敗を考えると魔女及び魔女魔術の存在を信じている人間、もしくは魔女裁判の妥当性を擁護する人間はまだそれ程多くなかったように見える。『鉄槌』の冒頭に付されているインノケンティウス8世による教皇教書には次のように述べられている。

6 この根拠は権威ある人物の書物からの引用で証明されている。その数は78人にも上る。特に第1部で多く引用されているのはドミニコ会出身のトマス・アクイナスである。『鉄槌』では「トマスによれば」という言葉をよく目にする。しかし、クラメルはトマスの言葉を恣意的に使用しており、トマスの意図とは異なった文脈で引用されている。クラメルのトマスの恣意的使用に関しては別論に譲りたい。

7 第2部は主としてヨハン・ニーダーの『蟻塚』(Formicarius)が引用されている。

ヨハン・ニーダーはドミニコ会修道士であり、ウィーン大学神学部教授やニュルンベルク修道院長などを歴任した。1435年から37年にかけて『蟻塚』(全5巻)を著した。その第5巻が魔女及び魔術に当てられている。

8 ニコラス・エイメリコ、『異端審問指針』、1367年。ドミニコ会修道士であり、アラゴンの異端審問官。『異端審問指針』が異端審問官に向けて書かれているのに対し、『鉄槌』第3部は世俗裁判所に向けて書かれている。これはクラメルが、拷問や処刑は世俗裁判所の方がより容易に行えると考えていたためである。

9 ウルリヒ・モルトール(1442-1507)太公ジークムントの廷臣やゲオルグ・ゴルザー(1401-1464)ブリクセン司教。

10 Joseph Hansen, *Quellen und Untersuchung zur Geschichte des Hexenwahns und Hexenverfolgung im Mittelalter*, Bonn, 1901, S.360-407

11 1484年秋。魔術によって天候を悪化させたとして多くの女性が魔女として逮捕された。この裁判は、魔女のこの行為に民衆が怒りを表し、それに市長が賛同したために成功した。このことから、魔女裁判は異端審問官1人の権力だけではなく、民衆とその地の権力者の賛同が不可欠だと考えられる。

12 ウォルフガング・ペーリンガー(長谷川直子訳)、『魔女と魔女狩り』、刀水書房、2014年、106-107頁。

13 Mackay, *op. cit.*, pp. 96-103.

1485年秋、チロル地方の都市ブリクセン司教区インスブルックで行われた魔女裁判。クラメルはこの前年に教皇から受け取った教書を携え、1485年7月23日魔女裁判を開始した。50人の女性が魔女として疑われた。この地を治める大公ジークムントやブリクセン司教ゴルザーはこの裁判には懐疑的であり、クラメルに法を遵守する旨を書簡で伝えている。しかしながら、教皇教書を携え、教皇から魔女裁判に関する権限を付与されているクラメルに対し強硬な姿勢を貫くことは難しく、最終的に7人の女性が魔女として逮捕された。当初裁判はクラメルの思惑通り進んだが、司教が送った法学者によって状況は一変する。この法学者は、クラメルの裁判方法に異議を唱え、また形式上の欠陥を指摘し裁判の無効を訴えた。10月31日、司教代理はこの裁判は無効であり、逮捕された女性は釈放されるべきであると最終判決を下した。その後もクラメルはインスブルックに留まり、再審の要求を何度か行っている。それに対し司教は、クラメルにインスブルックから撤退しないと身の保証を約束できないという旨の手紙を送っている。司教はクラメルのことを危険な狂信者と見なしていたようで、友人に宛てた手紙の中で「明らかに思慮分別に欠けている。早く街を出るべきである。」と書いており、また修道士ニコラスに宛てた手紙の中で「年のせいで子供っぽくなっており、彼の推論は証明されないものだ。」とクラメルのことを評している。

14 ウォルフガング・ペーリンガー、『同上書』。

・・・最近我々が耳にすることは大きな悩みである。南部ドイツの多くの場所やマインツ、ケルン、トリアー、ザルツブルク、そしてブレーメンの管区、街、領地、教区において、多くの男女が自身の魂の救済を忘れ、カトリック信仰から逸脱しているということを聞いた。・・・ハインリヒ・インスティトリスとヤーコプ・シュプレングルは異端的腐敗に関して教皇の書簡によって異端審問官に任命され・・・それにもかかわらず、当該地域における聖職者や平信徒は自身の地域では決してこのようなことは起こってはいないと恥知らずにも主張している。・・・¹⁵ また本文の第1部、特に問18¹⁶には、魔女裁判に反対している者の主張とそれに対する反論が書かれている。このような状況に対しクラメルは自身の弁明書の中で次のようにのべている。

・・・古に昇る太陽は、-彼は、墮落によって引き起こされた避けようのない損傷を通して歪められたのだが-始めから教会を墮落させることをやめない。教会というのは、新しく昇る太陽、つまり人間イエス・キリストが、あらゆる異端の毒でもって、彼自身の血を流すことによって、実りあるものにした。しかし、それにもかかわらず、特に世界のタベがその終焉に傾いており、人間の悪意が増大している今日において、悪魔はそれらの異端を通して攻撃している。というのも、悪魔はヨハネが聖書の中で、悪魔にはほとんど時間が残されていないと証言していることを、非常な怒りの状態で知っているからである。故に、悪魔は主の国において、成長するために、ある異常な異端の邪悪さ（つまり、魔女）を引き起こしているのである。・・・¹⁷

では、当時の人々は魔女及び魔術そして魔女裁判に対してどのような考えを持っていたのだろうか。上述の『鉄槌』第1部と中でも特に問18を参考にしながら見ていきたい。

魔女裁判反対派は、そもそも魔女が使う魔術に効力があることを信じていなかった。もちろん彼らの多くは、魔女や悪魔の存在は信じていたが、魔術は悪魔が見せる幻覚や

空想の産物であるとみなしていた。これは『司教法令集』において¹⁸、次のように記されているからである。

・・・夜間ディアナやヘロディアスと出かけると信じている女性がいるが、そのようなことは想像の中でしか起こりえないので、それを信じている者は不信心者である。・・・¹⁹

これによって、裁判に反対している者は他の魔術においても同様であると考えていたのである。また、神以外で創造物を良くも悪くも変化させることができると信じる者は不信心であると述べられているからである。そしてこのような者たちは非難されるべきではあるが、説教で正しい信仰に戻されるべきであるとしている。

では、問18では両者の意見の相違がどのように論じられているのだろうか。

裁判反対派とクラメルの争点は、魔女魔術が実際に起こりうるかどうかと魔女が魔術で害を与えることを神は許すかどうかの2点であった。

では、魔女魔術が実際に起こりうるかどうかについてのクラメルの意見を見てみたい。

・・・もし、魔女魔術が実在しないのなら、聖書やローマ法、教会法、そして神学者たちがそれらに関して述べることはなかったであろう。このように多くの権威ある書物が魔女や魔女魔術について述べているので、魔女や魔術は存在しているのである。・・・²⁰

クラメルはこの問18以外でも一貫してこのような主張を繰り返している。

次に、魔女が魔術を使って害を与えることを神は許可しているのかどうかについて見ていきたい。

裁判反対派は、次の5点でもって魔女魔術を神が許可していないことを証明しようとした。(1)神は様々な方法で人間を罰しているのだから、わざわざ魔女を使う必要はない。(2)もし魔女魔術が起こりうるなら、魔女は世界を破壊できるということになり、魔女に力を貸している悪魔の力が神の力より強いということになるので、神は許可しないであろう。(3)罪のない者、特に新生児が犠牲になることは、各人

15 インノケンティウス8世(1432-1492、在位1484-1492)。「Summis desiderates affectibus」(「限りない愛情をもって要請する」)(1484)。この教書は大きく分けて、「魔女による魔術を記した部分」と「クラメルとシュプレングルに全ドイツの教会管区で魔女裁判を正式に行うことができる権限を与える」部分に別れている。クラメルは自身の著書の権威付けのためにこの教書を掲載したが、教書の発布は執筆以前である。従って、しばしば言われるように、インノケンティウス8世が『鉄槌』に賛同していたとは言えないであろう。またクラメルはこの教書の発布の際、教皇もしくは教皇庁に賄賂贈っていると考えられている。このことから、教皇が本当に魔女や魔術を危険視していたかは分かっていない

16 Mackay, *op. cit.*, 問18. Behringer, *op. cit.*, pp.334-343.

17 著者による弁明書。Mackay, *op. cit.*, pp. 28-31. Behringer, *op. cit.*, pp.117-119.

18 『魔女狩り 西欧の三つの近代化』、黒川正剛、講談社、2014年、46頁。

19 教会法のこの箇所は『鉄槌』の中で裁判反対派の主張としてよく述べられている。

20 この主張は『鉄槌』の第1部を通して多く使用される理論である。

が自身の罪によって罰せられると言う原則に反している。(4) 神は悪が起こることを許さないのだから、魔女が魔術で悪を行うことを許すはずがない。(5) もし実際に魔女魔術が起こるのなら、何故、それを裁く裁判官たちが犠牲にならないのか。

つまり、裁判反対派は、神は善なる存在であり、悪を望んではいない。従って、魔女が魔術を使って悪を行うことを許可していない。このように考えていた。

この5つの論点に対してクラーメルは、次のように反論した。(1) 神は様々な方法で人間を罰する。そして様々な方法の中に魔女魔術も含まれているのである。(2) 魔女魔術も悪魔が魔女に手を貸すことも神の許しの下に存在している事象である。従って、悪魔力が神の力よりも強くなることはない。(3) 罪のない者、特に新生児が犠牲になるのは、悪魔が善人を欲するからであるが、神は各人の罪によってのみ罰するという事象はない。(4) 神は悪がこの世で起こることを許している。(5) 裁判官や異端審問官などは神からの祝福を受けているので、魔術をかけられることはない。

このようにクラーメルは、魔女が魔術を使い悪事を行うことを神が許しているとし、その許しの下で魔女や悪魔は可能な限りの悪事を行うと主張している。

以上見てきたように、1400年代においては魔女裁判は必ずしも賛同を得ているものではなかった。

3、『魔女への鉄槌』における魔女像

魔女に懐疑的な立場が多くいる中、クラーメルは『魔女への鉄槌』を書き上げた。その第1部において、クラーメルは魔女を神学的に異端であると定義したのであるが、異端とされた魔女たちは実際何をしていたのだろうか。そして、クラーメルは魔女のどのような行為を異端とみなしたのだろうか。第2部を考察することによってクラーメルが考えていた魔女、ひいては中世においてどのような行為が魔女的であると考えられていたのかを見ていきたい。

クラーメルは第1部問1において魔女を次のように定義した。

・・・前述のことを根拠としてたどり着いた結論は、

神の許可のもとで結ばれた契約のために悪魔の助力でもって実際の害を引き起こしうる魔女の実在性を主張することは、全くの真実であり正統信仰の立場であるということである。・・・²¹

魔女に女性が多い理由として²²、イブの創造とFEMINAの語源²³によるとしている。

従って、第2部で紹介される魔女もそのほとんどが女性である。

では、クラーメルや魔女裁判に賛成していた人々は魔女をどのような存在だとみなしていたのだろうか。

『鉄槌』における魔女の定義にもあるように、魔女が魔女であるためにはまず悪魔と契約を結ばなければならない²⁴。これは魔女が異端であるとする理由の根幹を成すものである。女性たちは(時には男性も)、富や権力、性的な快楽や復讐といったこの世での益を得るために、神と神への信仰を捨て悪魔を崇拝すると悪魔に誓う。この誓いでもって契約は成立するのだが、契約には明らかな契約と暗黙の契約の2種類が存在する。明らかな契約とは自身の意志によって悪魔と契約を結ぶことを意味し、暗黙の契約とは知らないうちに悪魔と契約させられている場合のことを指している。知らないうちにというのは、生まれたばかりの時に母親や産婆によって悪魔に捧げられたということである。この場合、悪魔と契約したことを本人は知らないで、他人に魔術が使えることを話してしまい(多くの場合父親に)周知のこととなる。

悪魔に誓った後、彼女たちは入会式を行うことがある。それは修道士が行う請願式を真似て執り行われる。この入会式では、悪魔は人間の姿をして現れ、新しく魔女になった者にこの世の富や惜しみない助力を約束する。代わりに魔女は肉体も魂も悪魔に捧げ、悪魔の勢力拡大に尽力することなどを誓う。その後、魔女は殺した新生児や乳児あるいは墓から盗んだ乳児の遺体を煮て、飲み物と軟膏を作る。これを飲めば魔女魔術を使って悪事を働くことができるようになり、軟膏もまた魔術に用いられる。

このような魔女と悪魔の集会に関する記述は『鉄槌』の中にしばしば見られるが、後世の魔女裁判で問題となるサバトのような定期的なものではない²⁵。クラーメルはサバト

21 Mackay, *op. cit.*, p.49. Behringer, *op. cit.*, p.148.

22 タイトルである 'malleus maleficarum' の maleficarum は女性・複数・与格(単数主格 mleficae)である。一般に男女両性を表す際は男性系(この場合 maleficorum)が使用されるが、敢えて女性系で書かれていることから女性を標的としていると考えられる。

23 クラーメルは女性を次のように定義している。

・・・女性は最初の女性エヴァ以来信仰心が少なく、情念のままに抑制がきかず、何よりも飽くことない肉欲を持つからである。女(femina)の語源は信仰(fe)が少ない(minus)である。最初の女エヴァは男(アダム)から作られた、それも曲がった骨から作られた不完全な被造物であり、悪魔の使いの蛇に誘惑され神に背き、悪魔についただけでなく、男を誘惑して神に背かせた悪魔の手先である。女性は蔑視すべき劣った性であるだけでなく、恐怖すべき悪しき性である。女は性欲・罪・死・悪・悪魔への誘惑者であり、罪の始まりである。

24 悪魔と魔女の契約の概念は『鉄槌』に新しいものではない。アウグステウスは魔女の悪の根幹は悪魔と魔女との契約にあるとしている。アウグステウス『キリスト教教理』2,19-21。また、トマス・アクイナスも悪魔と人間との契約について述べている。トマス・アクイナス『神学大全』2-2,96-99。

25 魔女の集会。シナゴグとも呼ばれる。

のような集会よりもむしろ魔術そのものを問題視していたと考えられる。そのため入会式の記述以降は魔女が使う魔術に関する記述が第2部を通して述べられている。

また、魔女となった人間は悪魔と肉体関係を持つと考えられていた。そして『鉄槌』においてはこの悪魔との肉体関係こそが魔女たる所以である。

・・・もはや（魔女たちは）従来の場合のような自身の意志に反して惨めな奴隷のように従っているわけではない。しかし彼女たちは肉体的快楽-最も汚らしいことだが-に対して協定を結んでいる。多くの司教区で、特にコンスタンツ司教区のラーフェンスブルクにおいて、我々によって世俗の手に引き渡された魔女の多くは、何年間も汚らしい行為に執着していた。ある者は20年間、ある者は12、13年間。そして全体的にもしくは部分的に信仰の否定を常に伴っていた。この街のあらゆる住人はこのことを証言をしており、秘密裏に悔い改め、信仰に戻った者は別として、少なくとも48人が5年以内に火に送られた。・・・しかし信仰の破棄を増大するためにこの種の汚らしい行為を行ったことについては全ての者が賛同した。・・・²⁶

また、魔女は悪魔の助けを借りて魔術を行う。魔術に関しては次章で詳しく述べる。ここで注意しておきたいことは、魔女には女性だけではなく男性もいた²⁷。男性の魔女(MALEFICORUM)も女性の魔女と同様、前述したように悪魔と契約をし、以下に述べるような魔術を使う。しかし、『鉄槌』では、男性の魔女に関する著者の経験はほとんど見られない。

以上のことが『鉄槌』及び同時代に魔女が存在し害悪を行うと考えていた人々の魔女像である。では、このような魔女はどのような魔術を使って人々を苦しめていたのだろうか。

魔術の考察に入る前に、当時のヨーロッパがどのような

状況に置かれていたのかを少し説明したい。

魔女が行うとされた魔術は、出産や天候、病気といった人間の命に関与しているものが多い。中世後期は小氷河期と呼ばれる時期に当たり、天候が不安定な時代であり、温暖な地中海を原産とする小麦やワインに大きな打撃を与えた。また、出生率も今よりもずっと低く、死産で産まれてくることも多く、成人まで育つことが今よりも困難な時代であった。また、疫病の流行や異教との戦い、内戦などで国が荒廃していた。このような中で、超自然的な現象を魔女に転嫁してしまったとしても不思議ではない。魔女は様々な事象に対するスケープゴートであったという従来の説にも納得がいくのではないだろうか。では、『鉄槌』第2部問1ではどのような魔術が述べられているのだろうか。詳しく見ていきたい。

4、『鉄槌』第2部問1に見る魔女魔術²⁸

『鉄槌』第2部問1には、魔女が使う魔術について述べられており、大きく次の9つに分けることができる²⁹。

- (1) 生殖に関する魔術³⁰
- (2) 感情に関する魔術³¹
- (3) 動物への変身³²
- (4) 場所の移動³³
- (5) 悪魔憑き³⁴
- (6) 病気や死に関する魔術³⁵
- (7) 産婆による新生児殺し³⁶
- (8) 家畜に対する魔術³⁷
- (9) 天候に関する魔術³⁸

この中でも(5)の悪魔憑きと(7)の新生児殺しについては、現代の我々にとっては魔術ではないように見える。しかし、悪魔と契約して行う悪事全般を魔術と考えるなら（実際著者はそのように考えていたようだが）、魔術に分類するのが妥当である。

では、それぞれを詳しく見ていこう。

26 Mackay, *op. cit.*, p.260. Behringer, *op. cit.*, pp. 194.

27 Mackey, *op. cit.*, 第16 - 18章 (pp.339-349). Behringer, *op. cit.*, pp. 323-343.

28 Mackey, *op. cit.*, pp. 213-349. Behringer, *op. cit.*, pp. 437-528.

29 ヨハン・ニーダーの『蟻塚』では、魔術を7つに分けている。1, 邪な愛を喚起する、2, 憎しみや嫉妬の種をまく、3, 生殖能力を奪う、4, 四肢の一部を損なう、5, 命を奪う、6, 理性を奪う、7, 上記の方法を用いて人の財産や家畜を奪う。

30 Mackey, *op. cit.*, 第4章、第5章、第6章、第7章。Behringer, *op. cit.*, pp. 396-428.

31 Mackey, *op. cit.*, 第5章 人間の感情を変化させることに関しては、第2部では章を立てて説明しているわけではない。これは第1部問7に詳しい。

32 Mackey, *op. cit.*, 第8章。Behringer, *op. cit.*, pp. 428-433.

33 Mackey, *op. cit.*, 第3章 Behringer, *op. cit.*, pp. 384-395.

34 Mackey, *op. cit.*, 第9章、第10章 Behringer, *op. cit.*, pp. 433-442.

35 Mackey, *op. cit.*, 第11章、第12章、Behringer, *op. cit.*, pp. 455-471.

36 Mackey, *op. cit.*, 第13章 Behringer, *op. cit.*, pp. 472-482.

37 Mackey, *op. cit.*, 第6章、第14章 Behringer, *op. cit.*, pp. 417-419, pp. 483-489

38 Mackey, *op. cit.*, 第15章 Behringer, *op. cit.*, pp. 489-496.

(1) 生殖に関する魔術

この魔術は、男性や女性の生殖能力を奪うとされている。しかし、もちろん男性の生殖能力そのものを奪うという例も『鉄槌』には出てくるが³⁹、その多くは生殖能力を妨げるというよりは、流産させ、生きたまま子供を産まれないようにさせる。著者は第2部第6章を「彼らが（悪魔と魔女を指している）生殖能力を妨げる方法」と題し、次のような例を挙げている。

魔術師は、ある男性とその妻が住んでいる家で、魔術によって妻の子宮の中の7人の赤ちゃんを次々に殺したと告白した。結果として女性は何年間も流産を繰り返していた。彼はその同じ家で全ての妊婦や家畜に同じようなことをした。何年間誰も出産をしていない。魔術師に、どのようにこのようなことを引き起こしたのかやどのように罪を犯すことができたのかということを拷問しながら尋ねたら、次のように答えた。「玄関の敷居の下に蛇を埋めた。それを取り除けば、繁殖は住人に戻ってくるだろう。」そして彼が予言した通りになった。土になっていたのを蛇を見つけることはできなかったが、土を完全に取り除いた。そして、その年に妻と家畜は出産した。⁴⁰

ある魔女は魔術で害を与える方法やいつでも触るだけで流産させる方法を知っており悪名高かった。この時、ある権力者の男性の妻が妊娠した。出産のためにある産婆のところへ連れて行った。産婆は城を出ないことと、特に例の魔女と話したりお互いに影響を与えるのを避けることを妻に助言した。数週間後、彼女はこの助言を無視し、城を出て宴会に集まっていた女性たちを訪れた。彼女が少しの間そこに座っていたら、魔女が現れた。魔女が挨拶をするように、彼女のお腹に両手で触れた時、妻は突然痛みと共に赤ちゃんが動いたように感じた。恐ろしかったので、妻はそこから家に逃げ帰り、産婆に何が起きたかを話した。産婆は「あなたは今赤ちゃんを失った。」と叫んだ。そして産婆が予言したように出産が始まった。妻はそのままの状態の流産ではなく、頭、足、手とバラバラの状態で流産した。これは明らかに、彼をつまみ夫を罰するために神の許しによって引き起こされた重大な懲罰である。⁴¹

男性の生殖器を取り去る魔術は恋人に捨てられた女性がかけることが多いが、こちらの魔術は実際に起こっているのではなく、悪魔によって幻覚を見させられているに過ぎないとされている。女性が男性に振られた際にこの魔術はしばしば起こる。

ある若い男性がある若い女性に好意を持たれていた。そして彼が彼女を無視した時、彼は生殖器を失った。⁴²

そしてこの魔術は魔術をかけた女性にお願いしたり、脅迫したりすると治る。

若い男は魔女がよく通る道を見張っていた。彼女を見付け、彼は健康を取り戻してくれるように彼女に懇願したが、彼女は自分は無実であり、何も知らないと言った。なので、彼はハンカチで彼女の首を絞めた。彼は「もし健康を回復させないなら、私の手によってあなたは死ぬ。」と言いながら、ハンカチを引っ張った。彼女は叫ぶことができず、腫れ上がった顔が黒くなってきたので、「放して、あなたを健康にする。」と言った。若い男が首からハンカチを取ったら、彼女は「あなたが欲しいものは戻った。」と言いながら、彼のお尻の間を触った。⁴³

(2) 感情に関する魔術

肉欲にかられた人々（男性も女性も）が、相手を自分に夢中にさせるためにこの魔術を用いる。魔術をかけられた人間は、自分の夫や妻を憎悪し始め魔術をかけた人間に愛情を抱くようになる。通常の愛情や憎悪との見分け方として、彼らは普通では考えられない相手に突然性的欲求を抱き、感情をコントロールできなくなる。これは結婚の秘蹟に対する冒瀆であり、姦淫の罪を増大させるものである。第1部でこのように述べられてはいるが、具体的な例を第2部で見つけることは難しい。

(3) 動物への変身

動物への変身は、実際の変身と、幻覚に分けられる。

実際の変身に関しては、魔女裁判に反対する者たち教会法の次の言葉によって魔術が存在しないことを証明しようとした。

あらゆるものの創造主である神以外に誰かが、生物を作ったり、被造物を良くも悪くも変化させたり、

39 Mackay, *op. cit.*, 第2部第1章参照。Behringer, *op. cit.*, pp. 348-363.

40 Mackay, *op. cit.*, p. 273. Behringer, *op. cit.*, p. 418.

41 Mackay, *op. cit.*, p. 274. Behringer, *op. cit.*, p. 419.

42 Mackay, *op. cit.*, p. 275. Behringer, *op. cit.*, p. 420.

43 Mackay, *op. cit.*, p. 275. Behringer, *op. cit.*, p. 421.

他の姿に変身させると信じているものは疑いもなく不信心者である。⁴⁴

しかし、クラーメルはこのような者たちは教会法の表面的なことしか理解しておらず、悪魔や魔女の悪を増大させる手助けをしているとして非難している。クラーメルはもちろん神のみが無から何かを作り出すことができるとは述べているが、被造物には完全な被造物（人間やロバなど）と不完全な被造物（蛇や蛙、ネズミなど）の2種類が存在していると考え、教会法は完全な被造物についてのみ語っているとしている。そしてアルベルトゥス・マグヌスの「悪魔は動物を変身させることができるが不完全な動物のみである」という言葉を根拠としている。

幻覚に関しては、変身している人間ではなく、周りの人間に魔術をかけているのである。つまり、周りの人間の視覚（視覚の奥にある想像の感覚）に魔術をかけ、そのように見せているのである。これに関しては、次のように述べている。

・・・アウグスティヌスが述べているように、悪魔によって行われると言われている人間の動物への変身は、実際に起こっているのではなく、見せかけである。⁴⁵

・・・変化には、本質的なものと付随的なものがある。同様に後者（付随的なもの）には2種類あり、つまりこのような変化は、見られるものに本来備わっている感覚によって、また見られるものに本来備わっていないが、見ている者の器官や領域に備わっている感覚によって引き起こされる。・・・⁴⁶

この感覚の変化による動物への変身については、アウグスティヌスが述べているキケロの例を出して説明している。

・・・悪名高い男性の魔術師のキケロはユリッセースの仲間を野獣に変え、・・・ユリッセースの仲間が野獣に変えられたことに関して、これは確かに目が騙されて出現したことである。つまり獣の姿はイメージ（記憶）の保管場所から想像力に対して生じた。想像上の視覚はそうであることを引き起こし、従って、他の領域や器官において作られた強い印象は、見る者に野獣を見ていると思わせるのである。⁴⁷

(4) 場所の移動

44 教会法のこの箇所も前述した教会法の箇所と同様『鉄槌』において非常によく用いられる。

45 Mackay, *op. cit.*, p. 155. Behringer, *op. cit.*, p. 267. トマス・アクイナス『神の国』18、18。

46 Mackay, *op. cit.*, p. 284. Behringer, *op. cit.*, p. 435.

47 Mackay, *op. cit.*, p. 284. Behringer, *op. cit.*, p. 436.

48 Mackay, *op. cit.*, p. 251. Behringer, *op. cit.*, p. 391.

49 Mackay, *op. cit.*, p. 252. Behringer, *op. cit.*, p. 392.

50 Mackay, *op. cit.*, p. 287. Behringer, *op. cit.*, p. 433-434.

魔女の飛行は『司教法令集』において、そのようなことを信じる者は不信心者であり、異教よりも悪であると述べられているが、これに関してクラーメルは一貫して否定しており、今の時代（1400年代）の魔女は昔とは異なっていると主張している。

魔女は子供や新生児を煮て作った軟膏を椅子や木の破片に塗りつけ、それで空を飛ぶ。また、悪魔が動物に変身して魔女を運ぶこともある。

・・・コンスタンツ司教区のヴァルドシャットの街で起こった出来事である。街の人間に嫌われているある魔女は結婚式に招待されなかった。街のほとんどの人間が出席した。魔女は怒り、復讐しようと考え、悪魔を呼び出した。彼女は悲しみの理由を悪魔に打ち明け、嵐を起こし、リングダンスからみんなを追い出してほしいと頼んだ。悪魔は同意し、彼女を持ち上げ、街の近くの山に運んだ。後の告白によれば、彼女は溝に注ぐ水を持っていなかったため、その代りに溝に用を足し、それを指でかき混ぜた。そうすると突然水が立ち上り、悪魔は激しい石程の大きさの嵐を街の住民が踊っている所へ送り込んだ。・・・⁴⁸

・・・火刑にされた魔女だけではなく、悔い改めた者たちも、現実においても空想においても移動をしたと告白している。・・・ブライザッハの街で、肉体において移動するのか、もしくは空想の中で移動するのかと魔女が尋ねられた時、魔女はその両方だと答えた。・・・⁴⁹

(5) 悪魔憑き

悪魔は魔女に頼まれて人間や動物に憑依して人間を苦しめる。クラーメルはトマス・アクイナスの、

・・・悪魔は彼らが働いている場所に存在しているので、悪魔が内側の領域（感覚や記憶）や空想を混乱させる時、彼らはそこに存在している。・・・⁵⁰

という言葉の根拠として悪魔が人間や動物の内側に存在することができることを主張した。

・・・シュトラースブルグのある街で（名前は伏せるが）、ある男性が家で使う木を切っている時、

突然大きなネコが何度も攻撃してきた。彼がネコを放り投げると、今度はさらに大きなネコが現れ、最初に現れたネコと共にさらに激しく攻撃してきた。彼がネコをどかさうとしていたら、3匹目が現れ、飛びかかったり、噛み付いたりしながら彼に攻撃した。・・・彼は仕事を中断し、木でネコを、一匹めは頭に、他の二匹は足と背中に攻撃し追い払った。その後一時間程、彼は仕事を続けていた。突然、行政長官の2人の従者が悪事を行ったとして彼を逮捕し、裁判官の所へ連れて行った。彼は自身の無実を主張したが、塔に閉じ込められた。・・・その後、裁判官は彼がなぜ街の3人の女性を襲ったのかと尋ねた。彼は「そんなことはしていない。その時間私は木を切る仕事をしていた。」と明かした。傍聴人は驚き、何が起こったのかを彼に説明させた。これは、悪魔の仕業だと判断され、彼は解放された。・・・⁵¹

これは、木を切っていた男性が、かつて悪魔と交わした契約を忘れていたために起こったと『鉄槌』では述べられている。人間の中に悪魔が存在する例として、クラーメルが教皇ピウス2世の時代にローマへ訪れた際に出あった事件についての記述がある⁵²。

(6) 病気・死に関する魔術

魔女は憎しみを抱く相手に病気を引き起こす魔術をかける。第2部第11章では、特にライ病と癲癩について、第12章ではそれ以外の病気に関する魔術を扱っている。

クラーメルは、ライ病や癲癩といった病気は、多くの場合体質や内的器官の欠陥にあるとしているが、魔術によって引き起こされることもあると述べている。

・・・バーゼル司教区で、ある男性が怒りっぽい女性に辛辣な言葉を発した。彼女は怒り、すぐに復讐すると彼を脅した。その夜、男性は首に水ぶくれがあるのを感じたので、触ってみると、顔全体と首が腫れ上がっているのが分かった。ライ病の恐ろしい姿が彼の全身に現れた。彼はためらうことなく、すぐに友達と行政官を呼び、その女性の脅しの言葉に関して何が起こったのかを彼らに話した。彼はその女性が魔術によって彼に害を与えたという確信を持って死ぬと言った。彼女は逮捕され、拷問にかけられた。裁判官が彼女に方法と理由を尋ねると、彼女は「彼が侮辱的な言葉を私に投げかけた後、私は怒りながら家に帰り、悪い霊に私の悲しみの理由を尋ね始めた。私が彼（悪い霊）に詳細

を話し、復讐する方法について尋ねたら、彼は「私に何をしたいのか。」と尋ねたので、私は「私は彼の顔をずっと膨れ上がらせていて欲しい。」と答えた。悪い霊は去り、その男を病気にした。それは私の要求以上だった。私は彼をライ病にすることは望んでいなかった。」・・・⁵³

第2部問12は、ライ病や癲癩以外の病気について書かれている。盲目、手足の不自由、不妊、激しい痛みなどが魔術によって引き起こされ、魔女はこのことを予め予言するとされている。

・・・「私は若い頃ある女性と恋に落ちた。彼女は常に結婚をせがんだが、私は断り、別の地域出身の妻を娶った。それにもかかわらず、私は友達として仲良くすることを望み、結婚式に招待した。彼女は来て、他のちゃんとした女性が贈り物を渡している時、私が招待したその女性は手を挙げ、周りに立っている他の女性に聞こえるように言った。「これから後、お前に健康な日々はほとんどないだろう。」恐ろしかった。花嫁は、彼女をこのように怖がらせた女性について見物人に尋ねた。というのも、すでに言ったように彼女は別の地域から結婚するために来たのだから。彼女はだらしがなく乱交するような女性だと別の女性が言った。この場合、彼女が予言したことが起こった。数日後、彼女（花嫁）は魔術に苦しめられ。その結果彼女の手足は使えなくなった。10年以上経った今もこの魔術の効果は続いているように見える。」・・・⁵⁴

また、魔術によって殺されることもあると『鉄槌』では述べている。

・・・太公の料理人は、ある外国の女性を妻にした。料理人の（昔の）恋人は妻に、大通りで人々が聞いている中、魔術と死を予言した。手を伸ばしながら、彼女は「お前は、夫と長く楽しめないだろう。」妻は次の日に病気になり、そして数日後あらゆる人間の罪を清算した。彼女の最後の時、彼女は「あの女が魔術で私を殺す。」と言った。・・・⁵⁵

・・・民衆の噂によると、名前を挙げることは控えるが、ある騎士が魔術で殺された。彼の恋人は

51 Mackay, *op. cit.*, pp. 291-292. Behringer, *op. cit.*, pp. 441-442.

52 Mackay, *op. cit.*, pp. 299-301. Behringer, *op. cit.*, pp. 447-448.

53 Mackay, *op. cit.*, pp. 311-312. Behringer, *op. cit.*, pp. 462-463.

54 Mackay, *op. cit.*, p. 231. Behringer, *op. cit.*, pp. 369-370.

55 Mackay, *op. cit.*, p. 317. Behringer, *op. cit.*, pp. 468-469.

彼に一晩一緒に過ごそうと言ったが、彼は過ぎたくなかったので、仕事で忙しと召使に伝えさせた。彼女は怒り、召使に言った。「彼に伝えて。あなたはもう私を苦しめない。」ある騎士は次の日病気になる、数日後埋葬された。⁵⁶

(7) 産婆による新生児殺し

産婆は悪魔に忠誠を誓うために新生児を悪魔に捧げ、魔女にする。これは、悪魔が神に選ばれる人間を減らしたいがために行われる。また、生まれたばかりの赤ちゃんは魔術を使う際の軟膏などを作るのに適しているの、殺されることもある。クラメールは産婆の魔女を、

産婆の魔女は他の魔女よりも、より大きな喪失を引き起こす。産婆の魔女ほど正統信仰を害する者はいない⁵⁷

と述べ、繰り返し非難している。

上述したことだが、罪のない新生児が魔女（魔術）によって殺されることに対して裁判反対派は疑いを持っていた。その答えとしてクラメールは罪は各人の罪によって罰せられるのではないと主張したが、ここでもそのことを強調している。また、子供は罪を犯していないのかもしれないが、その父親が罪を犯しているの、その罰としてこのようなこと（悪魔に捧げられたり、魔女に殺されたり）が起こると「出エジプト記」を例に挙げて説明している。

「私は嫉妬深い神である。父の罪は3、4世代下の子供たちにも訪れる。」⁵⁸

では、産婆の魔女はどのようなことを行うのだろうか。『鉄槌』で紹介されている例を見てみたい。

バーゼル司教区のタンの街で、火刑にされたある産婆が次のような方法で40人以上の子供を殺したと告白した。子供が子宮から出てくると、彼女は頭の天辺から脳まで真っ直ぐ頭をピンで突き刺した。⁵⁹

・・・夫の子供を妊娠していた。出産の日が近づいてきた時、ある産婆が、自分を雇うように要求した。彼女の悪い噂を知っていたので、私は他の人を雇うことに決めたが、彼女の要求を聞き入れるふりを

した。しかしながら、産む時に違う産婆を雇った。8日後のある夜、その産婆は怒って2人の女性と共に寝室に入ってきた。彼女たちが私が寝ているベッドに近づいてきた時、私は違う部屋で寝ている夫を呼ぼうとした。しかし、私は手足や舌が使えなかったの、見たり聞こえたりはしていたが、足先さえ動かすことができなかった。産婆は2人の女性の間立って、次のような言葉を言った。「私を産婆として雇うことを拒否したから、罰せられる。」彼女の横にいた2人の女性が、「しかし、彼女は我々の仲間を誰も傷つけてはいない。」と産婆に訴えたら、魔女は「彼女は私を不快にした。私は彼女のお腹に何かを入れる。しかし、あなたたちの望むように、彼女は半年間は痛みを感じない。しかし、半年が過ぎたら、彼女はかなりの痛みで苦しむ。」と言いつ返した。彼女が近づいてきて、手で私のお腹を触った。見えなかったが、彼女は私のお腹を切り裂いて、何かを入れたように見えた。彼女たちが帰った後、私は叫ぶ力を取り戻し、夫を呼んで何が起こったのかを話した。しかしながら、彼は「出産の時の女性は妄想や空想に悩まされる。」と言って、出産のせいにした。夫は私の言葉を信じようとしなかったの、私は「彼女は私に半年間与えた。もし半年経っても何の痛みもなかったら、私はあなたの言うことを信じる。」と答えた。」

彼女は、その時田舎の助祭長をしていた息子に似たようなことを話した。半年後、彼女は突然お腹に酷い痛みを感じ、叫ばずにはいられず、日夜みんなを心配させた。すでに述べたことだが、彼女は聖母マリアにとっても熱心であったので、彼女は、マリアの助けによって解放されるだろうことを信じて、毎週日曜日にパンと水を断った。ある日彼女が体の機能を行わなければならない時、あらゆる汚いものが彼女の体から出てきた。夫と息子を呼んで、彼女は「これが私の空想？半年後に真実が分かる？もしくは、私が木の欠片と一緒にトゲと骨を食べるのを誰かが見た？」バラのトゲが他のものと一緒に彼女の中に入っていた・・・⁶⁰

また、『鉄槌』では、魔女が産んだ娘は魔女であるとされた。

・・・ある父親が8歳になったばかりの娘と畑で穀物の調査をしていた時、日照り続きだったので雨が降って欲しいと考えており、「いつ雨が降るのだろ

56 Mackay, *op. cit.*, p. 317-318. Behringer, *op. cit.*, pp. 469-470.

57 Mackay, *op. cit.*, p. 164. Behringer, *op. cit.*, p. 288.

58 出エジプト記 20:5「あなたはそれらに向かってひれ伏したり、それらに仕えたりしてはならない。私は主、あなたの神。私は熱情の神である。私を否む者には、父祖の罪を子孫に三代、四代までも問うが、」

59 Mackay, *op. cit.*, p. 164. Behringer, *op. cit.*, p. 288.

60 Christopher, S.Mackay, *op. cit.*, p. 319-320. Behringer, *op. cit.*, pp. 472-473.

う？」と言った。娘は父親の言葉を聞いていて、無邪気に「お父さん、もし雨が降って欲しいなら、私がすぐに降らすよ。」と言った。父親は「どこでそんなことを覚えたの？雨を降らす方法を知っているの？」と尋ねた。娘は「もちろん。雨だけではないよ。嵐やヒョウを起こす方法も知っている。」と答えた。父親は「誰が教えたの？」と尋ねた。娘は「お母さん。誰にもこのことを言わないように言われた。」と答えた。父親が「お母さんはどうやって教えたの？」と尋ねたら、娘は「お母さんは私を主人に（悪魔に）委ねた。だから、私はいつでも私が望む要求のために彼を手に入れることができる。」と答えた。父親が「彼を見た？」と尋ねたら、娘は「私はお母さんのところに入って行って出て行く男の人を見た。」と答えた。父親がそれは誰なのかと尋ねたら、娘は「私たちの主人（悪魔を指している）。」と答えた。恐ろしかったが、父親は娘に今嵐を呼び出すことができるかどうか尋ねた。娘は「もちろん。少しの水があればできるよ。」と答えた。父親は娘を小川に連れて行って、「やってみて。けど、私たちの畑にだけだよ。」と言った。女の子は水の中に手を入れ、母親に教えられた通りに主人の名の下に水を動かした。突然、雨がその畑だけに降り注いだ。これを見て父親は「嵐も起こしてみて。けど私たちの畑にだけだよ。」と言った。娘がこのようなことを行っただけで、父親は、裁判官の前で妻を非難した。妻は逮捕され、有罪判決が出た後、火刑に処された。娘は再び洗礼を受け、神に専念した。その後彼女はそのようなことができなくなった。⁶¹

『鉄槌』では、魔女の娘の例がもう一つ紹介されている。その娘は既に成人しており産婆として働いていたので、母親と同様火刑にされている。娘が幼い場合は、神への信仰やそれを否定することにどのような意味があるのか理解できていないと述べられている。従って、子供の年齢によっては処刑されることはなく、悔悛し信仰に沿った生活を送ることが求められただけであった。しかし、後世の魔女狩りでは、魔女の娘は魔女であるとされ、子供の年齢に関係なく処刑されるということもしばしば起こった。しかし、その際は恩情として火刑に処されることはなく、苦しまないうちに処刑された。

(8) 家畜に対する魔術

家畜のミルクを出なくしたり、他人の家畜のミルクを奪ったりする魔術である。この魔術は頻繁に起こり、民衆たち

はこれに対して罪悪感を持っていないと述べられている。

・・・このようなことを信徒に説教しても、誰も説教者の指示に従わない。何故なら、多くの人は悪魔に呼びかけており、・・・彼は（神に対する）尊敬を無くしているわけでもないし信仰を否定しているわけでもないのである。・・・⁶²

この魔術はあらかじめ悪魔と契約していなくても、単に悪魔に呼びかけるだけで - 呼びかけた時点で悪魔との契約が成立したことになるが - 行うことができるとされている。

また、魔女は家畜を殺すこともある。病気で死ぬ場合とは異なり、魔術にかけられた家畜は突然死ぬ。

羊飼いはある動物をよく見る。それは、3、4回ジャンプした後、突然地面にぶつかって死ぬ。これは明らかに悪魔の力と魔女の手助けによって行われる。ヒュッセンとアイセンベルクの間のアウグスブルク教区で、とても裕福な男性が次のように述べた。彼と他の人は40頭以上の家畜（雄牛と雌牛）が魔術にかけられ、伝染病や他の病気が流行っていないのに、一年以内にこのようなことが起きた。家畜が伝染病や他の病気で死ぬ時は、突然ではなく徐々に次から次へと倒れる。しかしこの魔術は活力を突然奪う。⁶³

(9) 天候に関する魔術

魔女は嵐や雹、雷を引き起こすことができる。多くの場合、農作物に害を与えたり、雷で人を殺すためにこの魔術を用いる。クラメルは「ヨブ記」で悪魔がヨブに害を与えるために火を落したり嵐を起こしたりしているのだからこのような魔術は存在すると主張している。またトマス・アクィナスが「ヨブ記註解」において、

・・・風や雨そしてこのような大気の混乱は、地球や大気が発している蒸気の働きによってなされるので、悪魔の生まれもった性質はこのような事を引き起こすには十分である・・・⁶⁴

と述べているのもこの魔術の根拠であると論じている。

『鉄槌』にはこの魔術で民衆が苦しめられており、民衆が異端審問を要請したと述べられている。これは、確かに事実ではあるが、その後クラメルは民衆に疎ましく思われている⁶⁵。

魔術の例として、『蟻塚』からの引用と自身の経験を紹介

61 Christopher, S.Mackay, *op. cit.*, p. 326-327. Behringer, *op. cit.*, pp. 481-482.

62 Mackay, *op. cit.*, p. 328-329. Behringer, *op. cit.*, pp.484-485.

63 Mackay, *op. cit.*, p.332. Behringer, *op. cit.*, pp. 487-488.

64 Mackay, *op. cit.*, p. 333. Behringer, *op. cit.*, p. 490.

65 ウォルフガング・ペーリンガー、同上書、107頁。

している。

・・・『蟻塚』に捕まった人の話が載っている。暴風雨を引き起こす方法 やそれを引き起こすことは彼ら（魔女）にとって簡単なことかどうか裁判官に聞かれた時、「嵐を起こすのは簡単なことだ。しかし、私たちは意志によって害を与えることができない。」と答えた。そして付け加えた。「我々は神の助けを失った人々にのみ害を与えることができる。そして我々は十字架で 自分を守っている人に害を与えることはできない。次のような方法で行う。まず、野原で我々が示した人間を攻撃するための助手を送ってくれるように悪魔の王に懇願するためにある言葉を使う。そして、ある悪魔が来たら、我々は十字路で黒い雄鶏を投げながら、彼に黒い雄鶏を生贄に捧げる。それを受け取ったら、悪魔は従い、すぐに風を起こした。悪魔はいつも、私たちが意図した場所に嵐を起こしたり雷を落としたりする訳ではない。しかし、悪魔は神の許しに従ってそれを行う。」・・・⁶⁶

・・・「私は家にいて、正午悪魔が私を呼び出し、広い田舎一ヶ所の平原に水を少し持って行けと言った。私が悪魔に水で何をするのかと尋ねたら、悪魔は雨を起こすと言った。街の門を抜けて、木の下に立っている悪魔を見つけた。」と言った。裁判官にどの木の下かと尋ねられると、彼女は指を指しながら「塔の向かい側の木の下。」と答えた。木の下で何をしたらか尋ねられたら彼女は「悪魔が私に小さい穴を掘りそこに水を注ぐように言った。」と答えた。一緒に座っていたのかと尋ねられたら彼女は「私は座っていて、悪魔は立っていた、」と答えた。そして、どのような言葉と共にどのように水をかき混ぜたのかと尋ねたら、彼女は「悪魔とあらゆる悪魔の名の下で指で水をかき混ぜた。」と答えた。次に裁判官が尋ねた。「その水に何が起こった？」彼女は「水が消え、悪魔が水を上に持ち上げ

た。」と答えた。

仲間がいたかどうかと尋ねられると彼女は「この木の下に向かい側に、私の仲間として捕らえられた魔女（ミンデルハイムのアンナ）がいた。」「彼女が何をしたのかは知らない。」と答えた。最後に水が上に持ち上げられてから嵐が起こるまでの時間を尋ねたら、彼女は「私がか家に着くまで降らなかった。」と答えた。・・・⁶⁷

以上のように『鉄槌』第2部問1を考察すると魔女魔術は9つに分けることができる。

このような魔術は『鉄槌』が書かれる以前からも存在し、最も古い魔術の迫害は紀元前1200年のエジプトであり、ギリシャ、ローマでも弾圧されたり、魔術を使うことが禁止されたこともあった⁶⁸。しかし、『鉄槌』においてこのような魔術は、悪魔と魔女の契約を前提として行われるものである。従って、魔術を使う女性は悪魔との契約という宗教上の罪と実際に魔術で人間や家畜に損害を与えるという世俗の犯罪を犯しているのである。

5、終わりに

以上見てきたように『鉄槌』において魔女とは、(自身の意志か否かは関係なく)悪魔と契約し、悪魔に臣従を誓い、彼の助けを借りて魔術を行う者のことを指している。そして、その魔術は種類は様々だが、そのほとんどが人間の生命に関わることに關するものである。このようなことは現代においては理解しがたいことにみえるだろうが、その時代の医学も科学もまだ発達していない中世において、起こりうる悪は人智を超えた存在が介入して起こるものであった。その人智を超えた存在は悪魔であり、魔女は手先として人間やその他の創造物に害を与えるとされていた。

第2部に書かれている魔女の魔術、これは著者の異端審問の経験やその他の異端審問官たちの報告をもとにして書かれている。クラーメルは本来、異端を裁く異端審問官であった⁶⁹。その中で、彼は異端と同じように、むしろそれ以上に魔女に対して危機感を持っていったようである。フス

66 Mackay, *op. cit.*, p. 334. Behringer, *op. cit.*, pp. 491-492.

67 Mackay, *op. cit.*, p. 335-336. Behringer, *op. cit.*, pp. 493-495.

68 森島恒雄、『魔女狩り』、岩波書店、1970、12-18頁。

69 クラーメルは魔女裁判に力を入れ始める前からその死まで、ヴァルド派やフス派に対する異端審問に関与している。しかしクラーメルは魔女とカタリ派やヴァルド派といった異端、また知識人の(宮廷の)魔術師とを明確に区別している。クラーメルによれば、カタリ派やヴァルド派などの異端は創始者の誤った教えに従っているだけの「単なる異端」であり、魔女魔術による悪事や悪魔との契約も行わないので魔女とは全く別のものである。また、知識人の魔術師は、悪魔と契約を結び、悪魔の助力を得ている異端にして背教者ではあるが、その目的は未来の予見・占い・隠された物の発見であり、悪事を行わないので、魔女とは全く別のものである。

派⁷⁰やヴァルド派⁷¹などの異端とは異なり、魔女は15世紀にはまだ異端としてはそれ程認識されていなかった。そのため、クラーメルは魔女が行う魔術を第2部で紹介し、魔女の雛形を作ったのである。

70 カトリックの司祭ヤン・フス（1369年頃-1415年）がチェコで始めた改革派。ジョン・ウィクリフの考えをもとに宗教運動を行っている。1411年に破門され、コンスタンツ公会議において有罪とされ火刑に処された。

71 リヨン出身の商人ピーター・ワルドによって創始された信徒宣教運動。カタリ派と並んで中世最大の異端の一つとされている。清貧と禁欲を守った生活をし、聖書の翻訳などを行った。教会から異端宣告をされ迫害されるようになった。